

尺度使用マニュアル

<尺度名>

日常生活演技尺度

<測定概念>

日常生活の中で自らの対人行動を「演技」と感じることは少なくないと考えられるが、今までの研究ではこのような日常生活の演技について測定しようとした尺度はなかった。本尺度は日常生活においてどのような演技をどの程度の頻度で行っているのかという個人の演技パターンを測定することを目的としている。また福島（1996）は実験室による初対面の相手への自己呈示研究に比べて、身近な相手への自己呈示研究が少ないことを指摘しているが、今までの自己呈示研究では日常生活で行っている自己呈示全体に焦点を当てた研究は少ない。本尺度は日常生活における自己呈示の程度について、演技という視点から焦点を当てた尺度でもあり、自己呈示研究にも寄与する点があると考えられる。

<適用範囲>

非臨床群を対象として作成された尺度である。適用年齢は高校生以上ならば適用可能だと思われる。

<尺度構成手続き>

定廣・望月（2010）を元に項目化を行った。その際、意味の類似した項目や、回答数の少ないものなどを除いた。完成した項目について、著者らが内容的妥当性の検討を行い、その結果を踏まえ、行動ごとの演技頻度を測定する日常生活演技行動尺度（Acting Conduct Scale：以降 ACS）20項目、動機ごとの演技頻度を測定する日常生活演技動機尺度（Acting Motivation Scale：以降 AMS）25項目、場面ごとの演技頻度を測定する日常生活演技場面尺度（Acting Situation Scale：以降 ASS）23項目の3つの尺度を日常生活演技尺度を構成する尺度として作成した。因子分析、信頼性の検討は、ACSは大学生478名、AMSは大学生622名、ASSは大学生150名に対し行った。なおACSの回答者はAMSにも回答しており、ASSの回答者はACS、AMSに回答している。項目ごとに平均と標準偏差を求め、項目の分布の検討を行ったが、天井効果、フロアー効果はいずれの項目においても見られなかった。因子分析によってACSは「好印象演技」、「調和的演技」の2因子17項目、AMSは「関係維持」、「実利」、「関係獲得」の3因子22項目、ASSは「困難状況」、「他者共存」の2因子21項目が見出された。

<信頼性>

Cronbachの α 係数を求めたところいずれの下位尺度も.81—.90の高い値を示した。また

2 週間の間隔を空けて調査した 40 名について、1 回目と 2 回目の調査における下位尺度ごとの相関を求めたところ、 $r=.61-.87$ であり、いずれの下位尺度もある程度の継時的安定性が示された。

<妥当性>

全ての下位尺度が、セルフ・モニタリング尺度（岩淵・田中・中里, 1982）の下位尺度である「他者志向性」との間に有意な正の相関が見出されており（ $r=.39-.68$ ）、一定の構成概念的妥当性があると考えられる。しかし演技自体を測定した尺度が今までにないことから、基準関連妥当性については未検証である。

<採点方法>

ACS と ASS では示された場面、示された演技行動を行う頻度について「1. 全くしない」から「6. よくする」、AMS では示された動機から演技をする頻度について「1. 全くない」から「6. よくある」のいずれも 6 件法による評定を求めた。

ACS

「好印象演技」=項目 1+2+3+4+5+6+7

「調和的演技」=項目 8+9+10+11+12+13+14+15+16+17

AMS

「関係維持」=項目 1+3+4+5+6+7+12+13

「実利」=項目 14+15+16+17+18+19+20+21+22

「関係獲得」=項目 2+8+9+10+11

ASS

「困難状況」=項目 4+10+11+12+13+14+15+16+17+18+20

「他者共存」=項目 1+2+3+5+6+7+8+9+19+21

<尺度の使用について>

研究の目的に応じて、尺度の改変および一部利用することは可能。

(出典文献)

定廣英典・望月聡 (2011). 演技パターンに影響を与える諸要因の検討 パーソナリティ研究, 20, 84-97.

<連絡先>

定廣英典 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

Mail address: sadahiro11@yahoo.co.jp

<無料・有料の別>

無料。

<著作権関連情報>

出典を明記の上、ご自由にお使いください。